工業部会通信

（発行）
かながわ経済新聞合同会社
〒252-0239
相模原市中央区中央3-12-3
商工会館本館１階
※プリントしてご自由にお読みください。

かながわ経済新聞 KANAKEI

金属製地図、市に寄贈

青工研が本村市長訪問

フェスタで来場者と製作

工業系企業の42歳以下の若手経営者で構成される工業部会の下部組織、相模原市青年工業経営研究会（青工研）はこのほど、同市の本村賢太郎市長を訪問し、市を模した金属製地図を寄贈した。

金属製地図を手渡す青工研メンバー

この地図は2019年11月に行われた市のシンボルイベント「潤水都市さがみはらフェスタ」（実行委員会主催）に同会が参加した際、来場者とともに製作したもの。

同会や工業系企業のことを市民に広く知ってもらおうと企画し、フェスタ当日は、事前に用意した金属製パズルを来場者たちと組み立て、地図に完成させた。

受け取った本村市長は謝意を示した。同会の山口友彦会長（清水原コーポレーション社長）は「コロナを悲観的にとらえるのではなく、チャンスに変えて社業の発展につなげ、市の発展にも寄与していきたいです」と述べていた。

副部会長コラム「工業よもやま話」

経営者に必要な「傾聴」

経営者にとって商売の基本は他者と「会話する」ことです。他者と話すことで自身、自社のことを理解してもらうように努めます。このことは、何もお客様に対してばかりではありません。社員や仕入先に対しても同じです。会話をする態度や姿勢で相手との良い関係が構築できるかが決まります。

よく「会話は術」とも言われますが、それだけではない気がします。経営者は自分のことばかり話す傾向が強いと思います。しかし、私は会話に必要なことは「真摯に聞くこと」「耳を傾けること」だと思います。つまり「傾聴」です。そうすることで相手も真剣に話してくれます。

相手に対し、素っ気なく聞いていたらどうでしょうか。相手はすぐに分かります。そして会話を進めても全くかみ合わなくなってきます。

傾聴に必要なことは、相手と自分の二人だけの会話なら、半分ずつの時間配分が理想です。人数が増えればその割り算が持ち時間となります。お酒を飲んで6人以上になると最初は一つの話題でも、だんだん二つに分かれて全く違う会話をします。一人一人が話す時間が少なくなるからです。相手の話に傾聴しながら間をとりつつ、相槌を入れ、会話が弾むようにすれば商売も人間関係もうまく進みます。コロナでマスク越しの会話が多く、大変違和感があるこの頃ですが、目と耳と口を研ぎ澄ませて会話を楽しんでください。

（工業部会副部会長／湘南デザインCEO）

キッチンラボ稼働中 SIC開業希望者に指導

産業支援施設、さがみはら産業創造センター（緑区西橋本）が昨年稼働した研究開発型企業を支援する専用施設、R&D Lab（アールアンドディーラボ）1階に設置された「キッチンラボ」＝写真＝が動き出した。

飲食店の創業を支援するためのスペースを設置したスペース。普段は入居企業で働く従業員のリフレッシュスペースとしての役割があるが、本格的な厨房設備も整備。飲食業を考える起業家予備軍などに対し、場所を提供することでマーケティングや実践の場としても活用してもらう。

新型コロナウイルスの影響を大きく受けている飲食業界だが、地域における飲食文化の火を消してはならないと、市内で店舗を運営するSELAM・GROUP（セラムグループ）の山口陽一社長らが指導している。

山口社長は「飲食業の場合、いきなりの出店はリスクがある。ここならしっかりとノウハウを積んでから自分の店が目指せるようになる」と話している。現在、利用者も募集中だ。

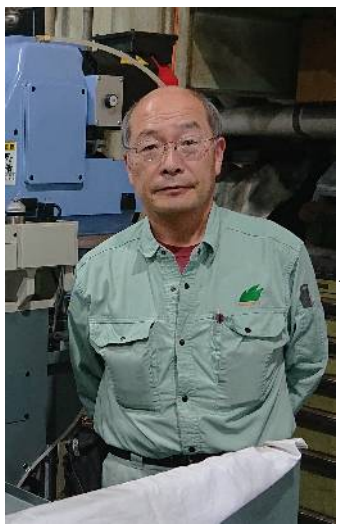
茂光製作所 修理事業が好調

茂光製作所（中央区宮下）が、部品修理の駆け込み寺になっている。機械加工を主軸に、最新鋭加工機によるデジタルとアナログのものづくりの融合を進める同社は、企業や一般消費者を問わず部品修理を受け付けている。破損した部品を持ち込めば、図面がなくても同じものを製作、修理する。

愛用工具の刃物が壊れ修理を依頼する大工や、紛失してしまったフォークリフトのねじをゼロから製作してほしいといった依頼まで、実にさまざまだという。

中には高額な金属製オブジェの修復を頼みにやってくる一般の人もいる。「景気が悪くなると、修理の仕事が増える」と茂木康則社長。あらゆるお困りごとに快く応じている。

本業では「樹脂以外の素材ならほとんど対応する」（茂木社長）とし、毎年設備を1台ずつ入れている。仕事を選ばない「コンビニエンス・ファクトリー」を目指し、最短で当日納入する特急生産も行っている。


同社の茂木社長

新規会員募集中
近未来技術研究会
相模原商工会議所工業部会